

同大統領館及査其遜ノ銅像
ジャクソン

アメリカ大統領館およびジャクソンの銅像(久米邦武編「米欧回覧実記」より)
明治11年刊行 佐賀城本丸歴史館蔵

佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM · SAGA PREFECTURAL ARTMUSEUM

31 March 2009

No.142



展覧会案内 佐賀城本丸歴史館開館5周年記念展

「近代との遭遇—世界を見る 日本を創る—」

平成22年1月1日（元日）～2月14日（日）

この展覧会では、幕末から明治にかけて海外へ渡った佐賀の人々が見た世界、彼らが学んだ知識や技術によって創りだされた近代日本の一側面を歴史・芸術二つの視点で紹介します。

(歴史編)

第一部 開かれた近代の扉

1. 海を渡ったサムライたち

1860(万延元)年、日米修好通商条約批准のため、幕府はアメリカに使節団を派遣しました。日本のサムライが海を渡ったのです。この使節団には佐賀藩出身の者も随行しました。その後佐賀の人々は、上海やヨーロッパへも派遣され、世界の現況を実地に見聞することになりました。

佐賀藩にとって、海外体験は、旧弊を打破する「大変革の好機」と捉えられました。1867(慶応4)年のパリ万博には、幕府、薩摩藩と共に、佐賀藩も独自に参加し、積極的に海外の情報や技術の獲得につとめていきました。

幕末の海外体験によって、日本人は世界各国の政治や経済のしくみ、教育や兵制、産業や技術、文化など様々なことを学びました。そしてそれは、明治政府の欧米諸国を模範とした近代化政策へと引き継がれていきます。

2. 久米邦武が見た世界

1871(明治4)年、明治新政府は岩倉具視を特命全権大使とする使節団を欧米に派遣しました。この使節団には、のちに『米歐回覧実記』を著す久米邦武や、旧佐賀藩11代藩主鍋島直大など、佐賀出身者も多く参加していました。

1873(明治6)年に岩倉使節団が訪れたウィーン万国博覧会は、明治政府が初めて参加した万博でした。明治政府は国家の威信をかけた事業として、各団が産業の力を競う「太平の戦争」である万博に出演しまし

た。このときの博覧会総裁が大隈重信、副総裁が佐野常民でした。

岩倉使節団の欧米歴訪や、ウィーン万博への日本参加は、近代日本の誕生を世界にアピールする旅であると同時に日本がこれから進むべき道を知る旅でもありました。

3. 博覧会の時代

幕末から明治にかけて、パリ万博・ウィーン万博を体験した日本人は、万国博覧会が、近代日本を世界にアピールする場となり、日本の産業や技術を向上させる上でも大変効果的であることを知りました。そのため明治政府は、1876(明治9)年のフィラデルフィア万博、1878(明治11)年のパリ万博など、積極的に万国博覧会への参加を続けました。

また同時に、国内の産業振興のため、万博の日本版とでもいいくべき内国勧業博覧会を開催しました。佐賀からも、様々な物産がこれらの博覧会に出品され、有田焼をはじめ産業の近代化が進むことなりました。



色絵六歌仙白龍文大花瓶 佐賀県立美術館蔵

(美術編)

第二部 描くことの近代

1. 佐賀の人・洋画を学ぶ

—百武兼行の洋画修学—

明治期の佐賀は芸術文化、ことに日本近代洋画史において重要な役割をはたす人物も輩出しています。佐賀市出身の百武兼行（1842-84）は、1871（明治4）年、旧佐賀藩第11代藩主鍋島直大のヨーロッパ遊学に随行し、1875（明治8）年頃から公務の傍ら洋画を学び始めました。以降ロンドン、パリ、ローマの三箇所でそれぞれ師につき、かの地の洋画アカデミズムを本格的に習得しました。

百武は帰国後ほどなく病を得、1884（明治17）年没してしまい、国内洋画壇での活躍は果たせませんでしたが、かれのすぐれた作品と充実した画業は、国内の洋画家たちのあいだでひろく知られるようになります。

2. 佐賀の人・美を見つめ、説く

—久米桂一郎のフランス留学—

百武兼行に続いて佐賀からヨーロッパに渡り洋画を学んだのは、久米邦武の長男、桂一郎（1866-1934）でした。久米は1881（明治14）年の第二回内国勧業博覧会出品の洋画、コンテ画を見て感激し、1886（明治19）年に絵を学ぶため単身フランスに渡ります。そこで日本人画家藤雅三の師であった洋画家ラファエル・コランを知り、藤とともに師事します。さらに、藤の訳説をつとめ、法学から洋画修学に転向したばかりの黒田清輝と知り合い、共同生活をおくりながら画技を磨いていきました。やがて二人は生涯の盟友となり、帰国後はそろって東京美術学校西洋画科にて教鞭をとります。「外光派」と称されるコランのもとで学んだかれらの清新な画風は、以降の日本画壇に新たな展開をもたらすことになります。

さらに久米は画作の他、美校で考古学や美術解剖学を講義するなど、美術の啓蒙家、教育者としても目ざましい活躍を見せました。

3. 佐賀の人・美の新時代を築く

—白馬会創設と日本近代洋画アカデミズムの形成—

近代フランスの自由な空気の中で絵を学んだ久米と黒田は、旧態然とした日本の洋画界に飽き足らず、かれらに共感を寄せる若き画家たちとともに、1896（明治29）年、新風洋画団体「白馬会」を創設します。佐賀市出身の岡田三郎助（1869-1939）もその創設メンバーのひとりでした。その卓越した画技と人柄を買われた岡田は、東京美術学校西洋画科助教授に抜擢され、1897（明治30）年、文部省留学生としてフランスに留学し、久米らと同じくラファエル・コランに師事します。岡田はコランの柔らかな色彩と作風をよく受け継ぎ、帰国後は女性像を中心に、西洋と日本の美の和合を意識した独特的な画境を模索しました。

明治半ばから後半にかけて、現在につながるあらゆる美術の制度が確立されました。佐賀に生まれた久米と岡田は、海外修学を通して自らをより深く見つめ、新時代の洋画—日本近代洋画アカデミズム形成の立役者となっていました。



久米桂一郎《泊船》油彩 佐賀県立美術館蔵

(左) パリのアトリエでの岡田三郎助
(右) 岡田三郎助《西洋婦人像》1900年 油彩

佐賀県立美術館蔵



(第一部 佐賀城本丸歴史館 学芸員 松田和子)
(第二部 佐賀県立美術館 学芸員 野中耕介)

エッセイ 学芸員人生を振りかえって

昭和52年、九州大学文学部哲学科美学美術史を卒業後、28歳で佐賀県立博物館に奉職した。八尋和泉先輩から、「学芸員の仕事は何か?」と問われて私は即座に返答することができなかつた。先輩は「物を未永く大切に保管することだ」と教えてくださつた。

同様に「過去700年間伝えられてきた物を未来へ700年間伝えていく義務がある」と菊竹淳一先輩からも教えていただいた。

人は健康を失つて初めてその価値を知るが、文化財も同様である。

奉職して間もなく、尾形善郎資料係長から展示案内を受けながら「資料を展示することと、保管することは矛盾することである」と説明をうけたが、その意味がよくわからなかつた。

昭和53年秋「古唐津展」を開催し、1ヵ月後に撤収作業をしているときのこと、展示していた茶碗を片付けると、紫袱紗の上にくっきりと跡が残つてゐる。螢光灯によって露光していた袱紗の部分が褪色してゐたのである。

そのとき私は尾形先生が言っていたことの意味をはつきりと理解した。

奉職間もない頃、上司から「秋の特別展覧会は『鍋島段通と鍋島更紗』をテーマとして、小杉道久さんと吉永さんに担当してもらいます」と告げられた。自分は陶磁器を専門とする学芸員だと認識していた私には初めて耳にする用語である。「鍋島段通」とは何か?「鍋島更紗」とは何か?

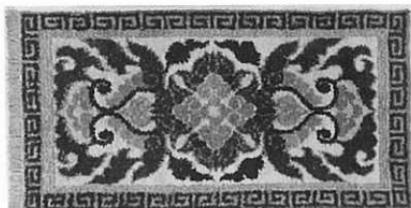
何も知らぬ若かつた私は「何でも見てやろう」の精神でその展覧会に果敢に取り組んだ。

「何でもやります。やらせてもらいます」と実に素直でガツツがあったと懷かしい。

鍋島段通は綿織りの敷物で、元禄年間に佐賀扇町の古賀清右衛門によって始められた。

江戸時代は「花毛氈」と呼ばれ、佐賀藩から將軍家への献上品にも用いられた。明治には「扇町紋絨」と呼ばれ、一般にも販売されるようになり、国内外の博覧会に出品・受賞するなど名声が高まり、明治中期以

降には「鍋島段通」の名称が定着した。中央の主文様には「蟹牡丹文」と呼ばれる牡丹の葉を蟹のはさみのように表した模様は最も多い。

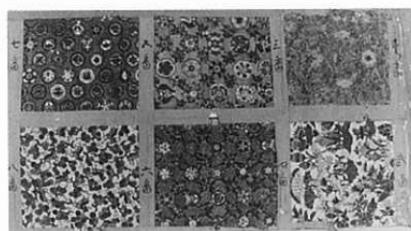


鍋島段通蟹牡丹文 佐賀県立博物館蔵

翌一昼夜を仕上げるのに、色糸を縫糸に約6万回結んで切り落とし、20日間ほど要する。

ざっくりとした木綿の肌合いに特徴があり、堺段通や赤穂段通などにも影響を与えたといわれ、現在は佐賀市内で「有限会社 鍋島段通 吉島家」が、唯一技法を伝えて制作している。

鍋島更紗は「鍋島更紗秘伝書」によると、豊臣秀吉による朝鮮出兵の折、鍋島直茂が連れ帰った工人の一人である九山道清の創始によるもので、「半兵衛更紗」とも呼ばれていた。



鍋島更紗見本帖 佐賀県立博物館蔵

工程は文様の輪郭線を木版で墨によって表す。次に型紙を用い、刷毛で染料を刷り込んでいく。「鍋島更紗見本帖は、藩から注文を受けるための見本帖であつたと考えられ、33種の見本が貼られており、ピンクや紫など鮮やかな色が見事である。

鍋島更紗は一般には流通せず、幕府や諸大名への贈答などに用いられた。

鈴田照次先生によって復元され、その技を引き継いだ鈴田滋人さんは平成20年重要無形文化財に認定された。

佐賀県立九州陶磁文化館に在籍中「ドレスデンの古伊万里とマイセン磁器」展の開催に携わった。江戸時代に有田焼がオランダ東インド会社によって海外へ輸出され、その名品が里帰りしたのである。展覧会当時は東ドイツがまだ存在した時代。ドレスデン国立博物館陶磁館長のイングローレ・メンツハウゼン女史が展示指導のために来館され、私が一週間応接させていただいた。

唐津から福岡へ見送りの途中、女史と通訳の吉中幸平佐賀大学助教授（当時）と私の3人は玄界灘を見下ろす見晴らしのよい公園で休憩していた。

「時間が少しありますので、ミニコンサートをします」と言って私は歌い始めた。「ステンчен」という男声合唱曲。女史は尋ねた。「あなたはその曲の意味がわかっているのか？」

「もちろん。私たち男声合唱をする者のドイツ愛唱歌のひとつで、最愛の人へ捧げる歌です」



メンツハウゼン女史と私

『私は60歳になるけれど、その曲を私のために歌つてくれたのはあなたが初めてです』

展覧会終了後、私はドレスデンに作品返納を行った。女史は二晩ドレスデン国立歌劇場のオペラに招待してくださった。

一晩目はウェーバーの「魔弾の射手」。その中の「狩人の合唱」は知っていたが、ストーリーは半分ほどしか理解できなかった。

二晩目はベートーヴェン唯一のオペラ「フィデリオ」。学生時代、私は地下牢に閉じ込められた囚人達の役で出演したことがあったので、ストーリーのほとんどを理解することができた。舞台の背景にはドラクロワの名画「民衆を率いる自由の女神」が掲げられ、フランス革命の劇的な状況を醸していた。

この時ほど趣味の男声合唱が役に立ったことはないなど実感したことである。

「部屋の中で置いていてよいものは本ぐらいで、家具などは人品を貶めます」と恩師の平田寛先生は言われた。

以来、せっせと本を買い求め、読まずとも、背文字を眺めているだけで、読んでしまったつもりでいた。狭い家はますます狭くなった。

「先生のおっしゃるとおりにしたら、本につぶされそうになりました」と申し上げたところ、先生は「やっぱり吉永は頭が悪い。何にもないのが一番なのだよ」と笑っておられた。

佐賀で一番広いマンションを購入して、地震対策として床から天井まできっちりとはまるキャビネットをすべての壁に設置した。

また本が飛び出してこないようにスティール製の引き戸がついている。そのため今は中にどのような本が入っているのかもわからない。

私たち学芸員仲間が、蔵書をどのように整理しているのか聞いてみたいところである。

平成21年3月31日に私は退職する。お育ていただいた方々に心からお礼を申しあげます。ありがとうございました。

(副館長 吉永陽三)

エッセイ 小学生を対象とした鑑賞の授業

「もっと!!たんけん びじゅつかん ～びじゅつかんがきょうしつにやってきた～」

県立美術館の「出張授業」

今夏開催した常設特別展「まだまだ探検!!美術館」に来館された小学校の先生方に請われて、公開授業のゲストティーチャーに招かれた。「第26回佐賀県造形教育研究大会三養基・神埼地区（テーマ　あい　ふれあい　ひびきあい　そして自分らしさが輝くとき～それぞれの思いを大切にし、生き生きと表現できる造形教育を目指して～）」（平成20年12月5日、神埼市立千代田西部小学校）において、松尾純子教諭（上峰町立上峰小学校）とともに、小学生に「鑑賞」の授業をおこなった。

対象は1年生で、授業内容は、①県立美術館所蔵絵画作品計8点をスライド（パワーポイントにて作成。文末図版参照）で子どもたちに提示、絵の内容にかんする簡単なクイズを出題し答えてもらう②教室に実作品（野村昭嘉作品《雲の製造！》）を持ち込み、クイズ出題の後学芸員が作品解説をおこなう、というもので、まさに当館の常設特別展「探検!!美術館」シリーズが教室に持ち込まれた格好である。子どもたちの反応は良く、作品の美しさに謎解きの面白さが加わり、皆、目を輝かせて作品を見つめ、活発に発言していた。また、クイズには子どもたちそれぞれの見方と解釈、想像力を問うものも含まれている。子どもたちの柔軟で自由な発想、想像力を引き出すことも今回の授業のねらいのひとつであった。「この牛、強そうに見える！」「空飛ぶ宇宙船みたい」「森の中に四つ葉のクローバーがあるよ！」等、設問を超えて、子どもたちは絵から受けける印象や感慨を、思い思いに元気に発表してくれた。

絵を読み解く（あるいはさまざまに想像を巡らせる）ために、まず「絵をよく見つめる」ことから始めてみる。そのように導くことで、作品を楽しく、よりふかく味わうことができる。これは子どもたちのみならず大人にも大変効果的な方法である。

「美を見つめ、美を思うこころ」を育てる

授業はすこぶる評判が良く、授業後にひらかれた分科会では多くの教諭から「同様の授業をぜひおこないたい」との要望が出された。佐賀県の小学校低学年の鑑賞教育といえば、実技時間中に子どもたち相互の作品を見ることが主であり、今回のような美術館所蔵の作品を題材にした、より本格的な鑑賞教育はほとんどなされていない。この点から今回の授業は画期的なところもあり、美術館と学校との連携活動として、ひとつ的好例となり得たと実感できた。

(学芸員　野中耕介)



この質問（クイズ）に答えた後、子どもたちはモチーフの牛について、さまざまな印象を語った。



当日の授業風景。（VTRより）

作品は野村昭嘉《雲の製造！》（佐賀県立美術館蔵）。他作品にくらべ幻想的、超現実的な表現であり、子どもたちの想像力をよりかきたてていた。

レポート 平成20年度 博物館・美術館セミナーを開催しました。

博物館・美術館セミナーは、よりいっそう博物館・美術館に親しんでいただくため、各分野の学芸員がそれぞれ選定したテーマについてわかりやすく解説する講座で、講座によっては実際に作品や資料を間近に見たり、館外に出て館外資料の見学も行います。今年度は15講座行いました。実施内容は表1のとおりです。

表1

	内 容	開催日
1	春のシギ・チドリ観察会	5/10
2	孔子を見る－描かれた聖人	5/28
3	肥前国産物図考Ⅱ	5/30
4	夏の佐賀城公園の野鳥	6/28
5	本庄江 汽水域の生物	8/2
6	鉛筆デッサン教室	8/26～28
7	佐賀城公園周辺の水草観察会	9/20
8	戊辰戦争140年	10/11
9	東名遺跡解説	10/18
10	肥前陶磁の美	10/21～23
11	土の美 古唐津 －肥前陶器のすべて－展見学	10/30
12	洪浩然 僮ぶ忘れず展見学	11/6
13	秋のシギ・チドリ観察会	11/15
14	よみがえる洪浩然の書	12/10
15	冬の佐賀城公園の野鳥	1/17

館内の展示を紹介する戊辰戦争140年や東名遺跡解説などのセミナーでは、はじめにその背景を説明した後、実際に展示場で展示の解説をしました。学芸員の解説に耳を傾けて、資料を見たり、資料に対する疑問を学芸員に尋ねたりするなど、資料を深く理解しようとする姿が印象的でした。



実技講習である鉛筆デッサン教室では、最初に手本となるデッサンを示して、よいところや見習いたいところ、鉛筆の使い方など初心者にもデッサンができるよう説明しました。人物をモデルにデッサンをしてもらい、最終日に参加者全員でお互いの作品を見る作品評議会を行って、デッサンの奥の深さを感じていただきました。



平成20年度は、佐賀野鳥の会の協力の下、野鳥観察会を4回計画しました。雨にならなければいいと祈っていましたが、残念ながら春と夏は雨になり、実際に観察を行うことができず、スライドで野鳥を紹介しました。秋は鴨獵の解禁日と重なり、鉄砲の音が響いて鳥が逃げ惑う中の観察会でしたが、クロツラヘラサギやツクシガモなどの絶滅危惧種を観察することができました。冬は、寒い中でしたが、子どもたちが多数参加してくれて「あの鳥何?」「どこどこ?」「アメリカフウの実っておもしろい!」など元気な声が聞こえてきました。



平成20年度は野外観察会を含めて15回の博美セミナーを行いました。参加人数はのべ300名を超える多くの方に参加いただきました。皆さん熱心に話を聞いてくださったり、質問をしていただきました。また、参加された方同士で歓談される様子を見て、佐賀を知るよいきっかけになってほしいと思いました。

平成21年度展覧会の案内〈博物館・美術館主催による展覧会など〉

- ・平成20年度新収蔵品展 会場：美術館2号展示室 観覧料：無料
期間：平成21年 4月17日（金）～ 5月17日（日）
- ・佐賀の絵画－特集 20世紀の人物像－ 会場：美術館3号展示室 観覧料：無料
期間：平成21年 4月17日（金）～ 5月17日（日）
- ・ふるさとは地球!!エコロジー博物館・美術館 会場：美術館2, 3号展示室 観覧料：無料
期間：平成21年 7月24日（金）～ 8月31日（月）
- ・第59回佐賀県美術展覧会 会場：佐賀県立博物館・美術館 観覧料：有料
期間：平成21年 9月19日（土）～ 9月27日（日）
- ・心をひらく絵の魔法－佐賀・横浜の子どもたちの絵画と宮崎駿代絵画展 会場：美術館2, 3号展示室 観覧料：無料
期間：平成21年10月 2日（金）～ 10月25日（日）
- ・武藤辰平展 会場：美術館2号展示室 観覧料：無料
期間：平成21年11月19日（木）～ 12月23日（水祝）
- ・織通をたのしむ－鍋島・赤穂・堺 会場：美術館3号展示室 観覧料：無料
期間：平成21年11月19日（木）～ 12月23日（水祝）
- ・佐賀城本丸歴史館開館5周年記念展 近代との遭遇－世界を見る 日本を創る－ 会場：美術館2, 3, 4号展示室 観覧料：有料
期間：平成22年1月 1日（金祝）～2月14日（日）
- ・博物館テーマ展示 会場：博物館3号展示室 テーマ展示コーナー 観覧料：無料
美術…「中世の風景」 平成21年 4月14日（火）～平成21年 5月24日（日）
工芸…「鍋島更紗をみる恋」 平成21年 5月26日（火）～平成21年 7月 5日（日）
自然史…「昆虫展」 平成21年 7月 7日（火）～平成21年 8月31日（月）
美術…「高柳快堂の画業」 平成21年 9月30日（水）～平成21年11月15日（日）
民俗…「昔の道具3－農－」 平成21年11月17日（火）～平成21年12月27日（日）
歴史…「新春をことほぐ」 平成22年 1月 1日（金祝）～平成22年 2月 7日（日）
考古…「発見された佐賀IV」 平成22年 2月 9日（火）～平成22年 4月11日（日）
・美術館「肥前刀」 会場：美術館1号A展示室 観覧料：無料
・美術館「玉手箱」 会場：美術館1号B展示室 観覧料：無料

* 本誌休刊について…次号以降しばらく休刊いたします。

佐賀県立博物館・美術館報 第142号

平成21年3月31日

編集発行 佐賀県立博物館・美術館

〒840-0041 佐賀市城内1-15-23 ☎ 0952-24-3947 ☎ 0952-25-7006

ホームページアドレス http://www.pref.saga.lg.jp/at-contents/kanko_bunka/k_shisetsu/hakubutsu/index.html

E-mail hakubutsukan-bijutsukan@pref.saga.lg.jp

印 刷 株式会社 三光